

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

RiITALIA (イタリア再発見) ⑱

*イタリアってなんだ? (前篇) *

国司 航佑

筆者がイタリア語の講師になってから3年が経過した。これまでは基本的にイタリア語の授業を担当してきたが、昨年度後半期、初めて「イタリア文学」という名の付く講義を受け持った。筆者の専門は19世紀末から20世紀前半にかけてのイタリア思想・文学であるが、これを授業のテーマにすることはためらわれた。生涯で一度しか文学講義を聞かないかもしれない学生に対して、日本はおろか欧米でもあまり注目されることのないこの時代のイタリア文学の話をして15週間耐えてもらう自信がなかったからである。そこで筆者は、やはりダンテ、ペトラルカ、ボッカッチョ等、最も著名な作家を中心に据えた「イタリア文学史」を語ることにした。

とはいえ、中世イタリア文学については、筆者は純然たる門外漢である。だから、このようなテーマ選びはリスクを伴うものである。研究者の間では常識とされていることさえ知らないかもしれないので、間違っただけを多く教えることになってしまいかねない。だがその一方で、自分が分からないことを学生と一緒に考えるというタイプの授業も成立しうるだろう。少なくとも、専門的な知識を誇示するだけの授業よりはよっぽどましだ……。結局、チャレンジすることは無駄にはならないはずだと自分に言い聞かせて、筆者は中世に始まるイタリア文学の歴史について講義をすることにした。

ところで、そもそも「イタリア文学」とはなんだろう。読者諸氏の中には、「イタリア文学」などというあまりに自明の事柄について、なぜ今更問い直す必要があるのかと、いぶかしく思う方もいる

かもしれない。だが、試みに簡単な定義を考えてみてほしい。すると、「イタリアで書かれた文学」や、「イタリア語で書かれた文学」といった定義がまず思い浮かぶのではないか。そのような定義をする方に、筆者はこう問いたい。それでは、イタリアとはなにか、イタリア語とはなにか。教科書的な説明をするならば、イタリアの国家統一が達成されたのは1861年のことである。それまではいくつかの小国が分立しており「イタリア」は存在していなかった。すると、「イタリアで書かれた文学」は150年そこそこの歴史しかないことになってしまう。

こういう指摘をすると、いやいやイタリアという国家の話をしているんじゃない、イタリア半島という地名について話しているんだよ、と反論してくる方がいるかもしれない。しかしながら、「イタリア半島」の歴史は、古代ギリシア・ローマの時代にまで遡ることができでしまうものである。ウェルギリウス(前70-前16)の作品は、もちろんイタリア文学の範疇に入れることはできないだろう。明らかに、「イタリアで書かれた文学」は、イタリア文学の定義として適切ではない。

それでは、「イタリア語で書かれた文学」という定義はどうだろうか。この定義であればラテン語で執筆していたウェルギリウスも自ら除外されてくるし、国家統一以前に書かれた作品であっても、イタリア語で書かれてさえいれば、イタリア文学のカテゴリーに入れることができるはずである。だが、この定義にも問題がないわけではない。例えば、読者諸氏は、次のような文句を耳にしたことはないだろうか。ダンテは、ラテン語ではなく

スカーナ語で『神曲』を書いた、云々かんぬん…
…。そう、イタリア文学の金字塔とみなされる作品『神曲』は、イタリア語ではなく、トスカーナ語で書かれたものなのである。やはり、「イタリア語で書かれた文学」という定義も万能ではなさそうである。

さて、本コラム冒頭で、昨年度後半期イタリア文学の講義を担当したと述べたが、筆者はこの講義を進めるにあたって上に見てきたような問を常に意識していた。すなわち、「イタリア文学とはなにか」、「イタリア語とはなにか」、「イタリアとはなにか」といった問を頭の片隅に置きながらイタリア文学を講義したのである。そして、この問を、初回と最終回の講義において学生にも向けてみた。ただし、抽象的な議論になるとイメージが湧きにくいだろうから、次のように、具体的な事例と絡めて出題した。

「イタリア中にガリバルディの銅像が建てられているのは、彼がイタリア統一(1861)の立役者だったからです。では、ダンテの銅像がイタリア中にあるのはなぜ？」



【トレンツのダンテ広場にあるダンテ像】

https://it.wikipedia.org/wiki/Monumento_a_Dante_a_Trento

読者諸氏は、イタリアの多くの都市にダンテ広場やダンテ通りが存在しているのをご存じだろうか。上に掲げるのは、イタリア北部の小都市トレンツにあるダンテ像の写真である。

トレンツは、筆者が高校時代に10か月ほど留学した思い入れの深い都市である。トレンツのダンテ広場は、トレンツ中央駅の目の前に位置する。留学中、長距離移動の際に筆者はよく鉄道のお

世話になったから、ダンテ広場の存在は今でも脳裏に焼き付いている。が、その広場の中央に位置するダンテ像について考えることはなかった。我が国の場合で例えると、紫式部の銅像が北海道にあるようなものだろう。よくよく考えると、とても奇妙なことである。

高校生だった筆者は、トレンツという都市に関して深い考察を加えることなく、日々を過ごしていた。日本文化との強烈なギャップに衝撃を受けていたので、イタリアという国家におけるトレンツの位置づけなど、考えたことがなかった。ただ、不思議に思っていたことが一点ある。それは、ホストブラザーたちが英語よりもドイツ語が達人だったことである。それは、彼らがドイツ語を第1外国語として学習していたからであるが、そもそもなぜドイツ語が第1外国語なのだろうか。第1外国語＝英語と脳内にインプットされていた日本人の筆者にとっては、そのことがとても不思議に思えた。

ドイツ語圏のオーストリアが近いからだろう、という想像はついていた。だが、この「近さ」が含意するところには全く無頓着であった。そう、実のところ、トレンツを含むトレンティーノ・アルト・アディジェ地方は100年ほど前まで(第1次世界大戦終結まで)、イタリアではなく、オーストリア(オーストリア＝ハンガリー帝国)の一部だったのである。留学後、こういった歴史的事実と自分の体験を重ね合わせることをしたとき、筆者は、はっと気づいた。それまで筆者は、イタリアの全てをトレンツでの留学体験の中に当て嵌めて考えていた。しかし私が留学した土地は本当にイタリアなのだろうか。いやそもそも、イタリアってなんだ？

ここで、例のダンテ像のことを思い起こしていたきたい。この銅像が建立されたのは1896年のことである。それは、イタリアの国家統一から30年ほどが経過していたが、トレンツはまだオーストリア＝ハンガリー帝国の一部だった時代である。当時、イタリアの愛国者は、トレンティーノ・アルト・アディジェ地方一帯を「未回収のイタリア」と呼びつつ、これをイタリアに「回収」すべきだと主張していた。しかし、これはあくまでイタリア側の主張であって、オーストリア＝ハンガリー帝国側はこうした主張を当然好ましく思っていなかった。

下に掲げるのは、1889年にボルツァーノに建立されたヴァルターの銅像であるが、これも上に説明したようなオーストリア側の反発が表面化したものと考えられる。ボルツァーノはトレンツのすぐ北に位置する町であり、右の地図を参照していただければ分かりやすいと思うが、現在ではオーストリアとの国境に最も近いイタリアの都市となっている。(ちなみにこの町では、ドイツ語の話せないイタリア人はいじめにあう、と言われる)



【ヴァルター像】

https://it.wikipedia.org/wiki/Walther_von_der_Vogelweide

ところでヴァルターとは何者か。正式名称ヴァルター・ファン・デア・フォーゲルヴァイデは、12世紀末から13世紀前半にかけて活躍した、中高ドイツ語最大の抒情詩人と目される人物である。この時代の人間によくあることだが、ヴァルターの生涯についての伝記的資料はほとんど残されていない。その出生地に関して、様々な学説があるらしいが、1867年に、とある大学教授がボルツァーノ近郊の小村をヴァルターの生地とみなす学説を発表しており、実はそれが、ヴァルター像建立の契機となったと言われている。しかし、この場合、彼の作品が中高ドイツ語で書かれていたという点が大きな意味をもつ。というのも、オーストリア帝国の民族的な起源は、まさにこの中高ドイツ語に求められるからである。つまり、ヴァルター像の建立はこの地のオーストリア帝国への帰属の正当性を暗示する所作でもあったのだ。

翻ってダンテ像の方はどうかと言えば、これは当然トレンツがイタリアに帰属すべきだということ

を主張するものと考えべきだろう。しかもダンテは、いわずとしたフィレンツェの詩人である。出生地フィレンツェ、逝去の地であるラヴェンナ、このようなゆかりのある土地であればいざしらず、トレンツというほとんど関係のない土地に建てられたダンテ像には、あからさまに政治的なメッセージが込められていると考えざるをえない。しかしここで、冒頭に掲げた疑問が再び頭を擡げる。ダンテは、イタリア語ではなく、トスカーナ語で執筆した詩人ではなかったか。トスカーナの詩人がなぜイタリアの国家統一のシンボルになりうるのか。



【トレンティーノ・アルト・アディジェ地方の地図】

<http://italiamappa.blogspot.jp/2011/06/mapa-di-trentino-alto.html>

こうした疑問に答えるためには、ダンテその人のことと同時に、ダンテが後世に与えた影響を詳しく検証する必要がある。しかし、その問題を追及するための紙幅は残されていないだろう。いやむしろ、筆者自身まだ漠然とした答えしか持ち合わせていないことを告白しなければならない。ただし、2015年度後半期のイタリア文学講義を通じて、この問の解に少しだけ近づけた気がする。学生たちが残してくれたコメントからも、多くのことを教えてもらった。だから、「イタリアってなんだ」という問題に関してはもう少し書くべきことがあるが、それは次回にまわすこととしたい。

(京都外国語大学講師)

『素晴らしい自転車レース 23』

イタリアを走ろう！

谷口 和久

●憧れの地へ

ロードレースファンなら、プロのレースの舞台となったコースをいちどは走ってみたいと思うものではないでしょうか。

いくなれば野球ファンがヤンキースタジアムで、テニスファンがウィンブルドンで、ゴルフファンがオーガスタでプレイするようなもの。

一般人がヤンキースタジアムやウィンブルドンでプレイできるのかどうかはわかりませんが、自転車の場合、現地に行きさえすれば、コッピが駆け上がったステルヴィオを、パンターニが死闘をくりひろげたモルティローロを、自分の足(自転車)で走ることが可能なわけです。



【ステルヴィオ峠のコッピ】

出典：<http://cycling-passion.com/2012/10/21/cima-coppi/fausto-coppi-stelvio/>

とはいえ実際に走ろうとなれば、まずはじめにスケジュールと予算を組まなければなりませんし、

仮に休暇も取れ費用の算段も組めたとしても、いざ現地を走ろうとなると、さまざまなハードルがあることも事実です。

●計画

いつ・どこに行くか検討するのとあわせて、どのようなかたちで行くのか、というのもひとつ大きなポイントになります。具体的には、個人で行くのか、あるいは旅行会社などのツアーで行くのかということです。

個人、とくに一人で行くということは、自分の好きなところを気ままなペースで走ることができるというメリットはありますが、移動や慣れない土地でのストレス等々、走る以前に疲れがたまってしまいうことも否めません。

また、万が一の事故や道迷いなどのトラブルに対処できないおそれもあります。人っ子一人いない峠道でガードレール(イタリアではあまり見かけませんが)を飛び越えてガケ下に急降下、というもありえない話ではありません。

その点ツアーであれば、現地での移動はおまかせですし、ガイドやサポートカーもつくので道案内や事故などのトラブルも安心。なにより走ることに専念できるのが大きなメリットと思います。

自身でサバイバルしていくことももちろん旅の醍醐味ですが、旅慣れない方や自転車に専念したいという方には、こういったツアーを利用して、はじめの一步を踏み出すのも一考かと思います。

ツアーであれば当然ツアーのプランの中から行先を選ぶことになりますが、個人で行くのであれば自分の走りたいコースを選ぶことができます。

個人的にはレースの舞台となった中でも、とくにドロミテやピエモンテ、あるいはロンバルディアなど、ジロ・ディ・イタリアの山岳コースがやはり一番のおすすめです。

荒々しい岩峰で知られるドロミテでは、数え上げればきりがありませんが、マルモラーダやトレ・チーメ・ディ・ラヴァレド。それにセツラ・ロンド Sella Rondo といって、セツラ山群周辺の2千メートル級の峠をつないでぐるっと一周するコースもたいへん走り応えがあります。

アオスタやピエモンテなどイタリア北西部であ

れば、チェルヴィーノ(マッターホルン)のふもとの村チェルヴィニアやツール・ド・フランスでもたびたび名勝負の舞台となったセストリエーレなど、雄大なアルプスの山ふところを満喫できます。

ロンバルディアでは、なんといってもステルヴィオ、ガヴィア、そしてモルティローロにとどめをさすでしょう。youtube で1988年のガヴィアや1994年のモルティローロなど、ジロの名場面を見てから現地入りすると、よりいっそうハートの火に油を注いでくれること間違いなしです。



【モルティローロ頂上】

その他の地方で最近とみに注目を集めているのが、トスカーナの丘陵地帯の未舗装自転車道ストラデー・ビアンケ Strade Bianche です。直訳の「白い道」の名のとおり、砂礫の道がトスカーナのワイン畑やオリーブ畑をぬって走っており、これをつなげてサイクリングコースとして観光の目玉としているのです。未舗装路といっても、日本のように粘土質のベタついたものではなく、ワイン畑などでよく見られる石灰質のカラツとしたものなので、自転車でもさほど走りにくいということはなさそうです。

近年はこのコースを使って、「エロイカ L'Eroica」という、往年の自転車黄金時代へのオマージュであるアマチュア向けサイクリング大会も開かれています。この大会では規定により、自転車は鉄製の古いタイプのもの、ウェアも昔のようなウールのポテツとしたものでなければならないということで、いわば一種のコスプレ大会ですね。皆、なんちゃってコッピ・なんちゃってバルタリに扮して楽しんでいるわけです。

「エロイカ L'Eroica」の開催は秋ですが、標識は一年中常設されていますので、いつ行ってもコースをたどることができます。ワイン畑の広がるトスカーナの丘陵を走るのには、ジロなどのコースを走るのとはまた違った魅力があります。

イタリアライドの時期としては、トスカーナを別とすれば、山岳地帯はやはり夏がベストシーズンです。実際、5月～6月に開催されるジロでは、降雪でレースがキャンセルとなることもしばしばですから、7月～8月が2千メートル級の山場を走るにはベスト。それでも天候によっては寒さにふるえることもありえます。防寒対策は日本の山を走るとき以上に留意すべきでしょう。

●準備

走行時の持ち物は基本的に国内で走るときと変わりありませんが、異なる点といえば、パスポートと海外保険の証書は必携です。雨や汗でぬれる可能性もあるので、ビニール袋などに入れておく方がいいでしょう。

現地では日本のようにコンビニや自動販売機はありませんので、水や補給食は多めに持つ方がいいと思います。もちろんわざわざ日本から持って行く必要はありません(笑)。現地のスーパーでミネラルウォーターや補給食になりそうなスナック、お菓子などは購入できます。余談ですが、スーパーも土地柄・お国柄があり、楽しめます。

話の順は前後しますが、日本から自転車をどのように持って行くかというのも問題です。そもそも自分の自転車を持って行かず、現地でレンタルという選択肢もあります。ドロマテなど夏のバカンス地では、ロードレーサーやマウンテンバイクなどもレンタルできます。



【レンタサイクルの看板】

さて、自分の自転車を持って行くとなると、どのように持って行くかが問題になります。いまはクッション材の入った自転車ケースなどありますので、そういったものを利用するのも手ですし、段ボールも意外と使い勝手がいいかもしれません。10年以上前にフランス行きの自転車ツアーに参加した際、私の自転車はハードケース(樹脂製)に入れていたにもかかわらずギアが曲がってしまうというトラブルにあったのですが、薄っぺらい輪行袋(布きれ一枚で自転車をおおう袋)で運ばれた自転車はまったく問題がなかったということもありました。

●走るにあたって

まず一番の注意点は、右側通行ということでしょう。日本ではいまだに逆走(日本でいえば右側通行)している自転車をよく見かけますが、イタリアをはじめとしたヨーロッパではまず見かけることはありません。



【ガルダ湖畔で道案内してくれたイタリア人ライダー】

交通マナーということであれば、イタリアでは日本で自転車で走るときのような不快感を覚えたことがありません。日本では先にあげた逆走自転車をはじめ、幅寄せトラックやそとけクラクション、すぐ横をムリヤリすりぬけていく追い越し車両など、日々ヒヤリハットにさらされながら走ることにありますが、社会の成熟度の違いでしょうか。

社会の成熟度の違いということであれば、イタリアの、とくに北部の山間地を走っていると、道ばたでゴミや空き缶を目にすることはまずありませ

んし、投票意欲を減退させるような政治家のポスターや、誰もいうことを聞いていなさそうな交通安全の標語など、一切よけいなものを見かけません。目に入るのは美しい自然と整然とした道筋のみ。

道路の違いといえば、日本の山道はつづら折りでひとつひとつの直線区間が短い傾向がありますが、イタリアのそれはかなり長い傾向があります。

これがどういう影響があるかというと、まず登りでは、はるか先まで道が見渡せてしまうので、精神的にかなりつらいものがあります。「まだあそこまで登らないといけないのか・・・」と、そもそもそんなところを登りに来たのは誰のせいかということに棚に上げて八つ当たりしたくなるほどです。

登りに関してはその程度の問題(?)ですが、気をつけなければならないのは下りです。直線区間が長いということは、それだけスピードが出やすくなります。ことに遠くまではるか見渡せるような山岳地帯ではスピード感覚が麻痺してきますので、いつのまにか70キロ、80キロといった速度になることも大いにありえます。

また峠道の距離も長いので、ブレーキが過熱して制動が効かなくなったりすることのないよう、下りでも適度に休憩を入れた方がいいでしょう。

最後になりましたが、なにより安全と健康に気をつけて、楽しい自転車旅行をお楽しみください。

<協力>

岩井孝夫氏(バイオリン工房クレモナ)

(株)フェロートラベル

【参考文献】

Touring Club italiano, *L'Italia in bicicletta*, Touring Editore Srl, 2007

『ジロ・ディ・イタリア峠と歴史』(安家達也著,未知谷,2009)

(当館スタッフ)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>